ヘンリー・ジェイムズの自伝と アリス・ジェイムズの日記

舟　阪　洋　子

ヘンリー・ジェイムズの自伝第二巻 *Notes of a Son and Brother*（1914）は、そのタイトルが示す通り、意図としては両親の son として、兄弟妹の brother として、家族についての覚え書を書くというものであった。実際、父親と兄ウィリアムについては手紙を何通も掲載しては何章分も語り、父親にからめて母親の献身ぶりについても賞賛をこめて語り、南北戦争に出征した弟ウィルキーについても戦場からの手紙を掲載し、その戦場での負傷について語り、同じく戦争に出征した末弟ボブについても手紙を掲載すると同時に、その生かされなかった才能を惜しんで大して出来がいいとも思えない彼の詩を一編、長い脚注をつけて紹介している。それなのに、あの本一冊の中で妹アリスの名が登場するのは、掲載された父親とウィリアムの手紙の中だけというのは、注目すべき事実ではないだろうか。もちろんジェイムズの時代に「妹」という存在が、私生活においていかに意味のある存在であろうと（実際ジェイムズは両親の死後一人になった妹としばらくは「仲良く所帯をもったように」[quoted in Edel, “Portrait” 9] ボストンで暮らし、自分の相続分の一部を妹に譲り、後に妹がイギリスにやってくるとすぐそばに住み、彼女の病床を楽しませ、ヨーロッパに旅行中でも妹の病状次第ではロンドンにとって返すことも一度ならずあった)、それでも公的な生活においては無に等しい存在であったからと論ずることもできるだろう。しかし自伝第二巻におけるこのアリスの徹底した不在は、同書での従妹ミニー・テンプルの扱われ方によって、さらに際立つことになる。

ジェイムズは自伝第二巻を、1859年のジュネーブ滞在そしてボンの夏を経

て1860年秋に帰国するあたりから始めているが、彼は最初の滞在地ニューポートで出会った画家のウィリアム・ハント、後に壁画・ステンドグラス作家として名を上げるジョン・ラファージと並んで従妹ミニー・テンプルを自分にとって「重きをなした人物」とし、その多彩な魅力をほめたたえている。さらに最後の章では、友人チップマン・グレイから寄贈されたミニーのグレイ宛の手紙を相当数掲載して、結核で死の恐怖におびえながら、なお生を夢見る姿を描き出し、彼女の死がウィリアムと自分にとって青春時代の終わりを告げたという文章で第二巻を結んでいる。私たちはアリス・ジェイムズが残した日記を読むと、そこに描き出される彼女自身の姿――病気で寝たきりの状態で、余命いくばくもないと知った時にも、なお旺盛に知識を吸収し、生きる気力に満ちている姿――がミニーの姿に重なることが分かる。1892年のアリスの死後、彼女の友人キャサリン・ローリングから送られてきたアリスの日記[1]を読んで「わが家族の名声に新たに付け加わるもの」という賛辞を呈したヘンリー・ジェイムズが、なぜその後に書いた自伝の中では妹について、まるでミニーの背後に消し去るように、沈黙しているのか。しかもHabegger（“Woman Business”）の調査が明らかにしたように、自伝の中に掲載されているミニーの手紙はジェイムズの手で「編集」され、つまり部分的に削除されたり、言葉を変えられたりして、その結果ミニーが「別のより上等の人物」（147）へ、「意図的に自分の小説に都合のいいものにされて」（148）しまっているということを考えると、アリスについてのこの沈黙も意図的であるように思えてくる。

本稿では、ヘンリー・ジェイムズとアリス・ジェイムズの関わりを考えるために、ヘンリーが小説の中で描いたsister、つまり『カサマシマ公爵夫人』に登場するロージー・ミュニメント――主人公ハイアシンス・ロビンソンが敬愛するポール・ミュニメントの（妹ではなく）姉で寝たきりの娘――とアリス・ジェイムズが残した日記を検討し、ジェイムズの沈黙の意味を探ってみようと思う。

ヘンリー・ジェイムズは四人の兄弟妹のうちで、妹アリスと精神的にもっとも相通じるものをもっていたと思われる。兄ウィリアムは子供のころから「僕はね、ののしったり悪態をついたりする奴らと遊ぶのだよ」と言って姿を消す、常に一歩先を行く存在であり、愛想の良さ、社交性を特徴とする弟ウィルキーはヘンリーとはまったく違うタイプ、下の弟ボブとはそれほど交渉がなかったようで、南北戦争の後は酒におぼれ、仕事や家族に対する態度が無責任と、兄妹たちの間でも批判を浴び不信感をもたれていた。少なくともアリスが四人の兄の中でヘンリーにもっとも親近感をもっていたらしいことは、彼女が日記の中で語る1856年の夏の思い出にあらわれている。招かれた家の庭で、ウィルキーとボブは姿を消し（「それは悲しくもなかった」と彼女は言う。この家に向かう馬車の中で「ウィルキーとボブの靴の踵が私のむこうずねに食い込む、いつも以上の苦痛」に耐えたことも彼女は語っている）、アリスとヘンリーが取り残されて所在なく過ごすうちに、ヘンリーが「こういうのをきっと苦難のもとでの楽しみっていうんだね」というのを聞いて、その独特の言い回しに妹としてのプライドがかきたてられたと言い、それが「純粋に知的なプロセスを意識した最初の瞬間」だったと述懐している（*D* 128－29）。

四人の兄の妹として、アリスの家庭での様子をうかがわせる文章がある。アリスは兄ウィリアムの息子ビリーが妹ペギーをひどくからかうらしいと聞いて、ある日の日記にこんなことを書いている。

> ...she bears it usually serenely, but every now and then her indignation breaks forth. The other day she said to her mother, "When I speak so to Billy, it makes my stomach tremble." Heaven forbid that this should be a portent of heredity, and that her innocent framework should be destined to enclose within its depths a cave of emotional borborygmus, as has been known！（*D* 176）

「例があるように」（as has been known）という言葉で、アリスが家庭内では唯一の女の子として、可愛がられたかもしれないが、常にからかわれる存

在、決してまともに向き合ってはもらえない存在だったことが想像できる。ウィリアムがいかにアリスを性的なからかいの対象にしたかについては、Strouseが説明してくれる通りである（52－54）。

62年から63年の冬のニューポートというと、ヘンリー・ジェイムズが自伝第二巻で扱っている時期である。その頃を思い出して、アリス・ジェイムズが日記に印象的な文章を残している。

> Owing to muscular circumstances my youth was not of the most ardent, but I had to peg away pretty hard between 12 and 24, "killing myself," as some one calls it—absorbing into the bone that the better part is to clothe oneself in neutral tints, walk by still waters, and possess one's soul in silence. How I recall the low grey Newport sky in that winter of 62－3 as I used to wander about over the cliffs, my young soul struggling out of its swaddling-clothes as the knowledge crystallized within me of what Life meant for me, one simple, single and before which all mystery vanished. (*D* 95)

これは彼女が40代になって思い出して書いている文章であるから、14、5歳当時の意識をそのまま再現したものではもちろんない。しかしこの時期から彼女が神経症の兆候を見せるようになっていたことを考えると、彼女がこの頃一つの危機を迎えていたのは確かだろう。文化人として発言する父親、華々しく戦争に参加した兄ウィルキー（63年6月には四男ボブも入隊している）、まだ道が定まらぬとはいえ明らかに人並み優れたウィリアムとヘンリー、これら公的な領域で活躍する、または活躍しそうな男たちの中で、女性としての自分の生き方は私的な領域に閉じこもり、「中間色に身を包み、波静かな水際を歩き、魂を沈黙させておくこと」でしかありえないと悟って、その生き方を積極的に貫いてきたと彼女は書いている。しかし戦争に行った二人の兄はもちろん、ロレンス理学校に進みながら神経性の病に悩まされて家に戻っていたウィリアムも、文学史上有名な「腰痛」をかかえてハーバードの法学部という不可解な選択をしながら、一方で文学の道に進む決心をしかけていたヘンリーも、皆自分の問題にかかずらって、アリスの孤独にも葛藤に

も気づいていなかった。

ヘンリー・ジェイムズが妹をライバルにすらなりかねない知性と感受性をそなえた個人として意識したのは、彼女が両親を失った後、友人キャサリン・ローリングに伴われて1884年末イギリスにやって来てからであろう。彼女は翌年９月頃にはロンドンの兄の住まいの近くに落ち着いていた。1886年２月ヘンリーが友人ゴドキンに宛てた手紙の中で「妹は今ロンドンの私の近くで冬を過ごしています。うれしいことに、こちらに来て以来一番具合がいいようです。きっともっと良くなり、これから社交界の華になることでしょう。外出することはなく、ソファから動けませんが、その洞察力の幅広さ、イギリスの情勢に精通しているのに驚かされます」（*L* 119）とアリスの近況を伝えている。さらに同年３月にはウィリアムに宛てて、アリスが元気そうにほとんど毎日客を迎えており、その会話は「才気に溢れ、わくわくさせる」もので、「もしこのままロンドンに留まれば、どんなイギリスの婦人でも簡単に打ち負かすことができるでしょう」と、彼女が「サロンを開いている」様子を伝え、「アリスについての偉大な事実は、彼女の人に会う能力が一年前から五倍も六倍も増したということです」と驚いたように付け加えている（*L* 114－15）。アリス・ジェイムズ自身が「すべてを与えよ、しかし何も求めるな」と徹底した自己否定を教え込んだ母親（*D* 221）の呪縛から解放されたという面も考えられるが、むしろヘンリーが初めて気づいた時の驚きだったと言うほうが正しいだろう。

アリス・ジェイムズはイギリスに来てからずっと病身で、自分自身の目でイギリスを観察することはできなかった。にもかかわらずヘンリーを驚かすほど「イギリスの情勢に精通している」のは、彼女が旺盛な知識欲と好奇心を満たすべく本、雑誌、新聞を読み、交際範囲の広い兄やキャサリン・ローリング、さまざまな訪問者たち、さらには彼女の世話をするナースや家主の女性などが語ってくれる話を聞いて、相当量の情報を収集しているからであった。彼女がその情報に基づいていかにイギリスの諸相を攻撃したか――その階級制度、堕落しきった王族・貴族、貧民階級の惨めさ、にもかかわら

ず彼らが「目上の者」に向ける絶対的崇拝、形式ばかりの英国国教会、アイルランド自治に反対する頑迷さ、後進国に進出しての原住民の虐殺（「原住民の扱いを非難するなんてアメリカ人には似合わないだろう。でも私たちのインディアンへのひどい扱いが純粋な極悪非道という仮面に隠した兄弟愛だなどとほのめかされるのは聞いたことがない」〔*D* 88〕と彼女は付け加える）――、それは1889年５月に彼女が日記を書くようになるまで私たちが直接確かめることはできない。しかし1888年10月のウィリアム宛の手紙の中でヘンリーが「彼女がイギリスというかイギリス人のことを好いているようには思えません。人々、その考え方、気風、偽善ぶりなどです」と報告し、自分としては「今はもうイギリスとアメリカを大きなアングロ・サクソンの総体としてしか見ることも感じることもできません」と宣言している。そしてアリスがイギリス人を嫌うのは「彼女が閉じこもった生活をしているから、またイギリス人の見方が部分的で受身で断片的で一方的だからだ」と批判めいたことを付け加えている（*L* 243－44）。

ヘンリー・ジェイムズがその頃1885年９月から連載を始めた『カサマシマ公爵夫人』（*The Princess Casamassima,* 1886）の中に、アリス・ジェイムズを思わせる寝たきりの女性が登場する[2]。地下組織の活動家ポール・ミュニメント（Paul Muniment）の姉ロージー（Rosie, Rosy）である。彼女が作品の中で果たしている役割が、ヘンリーの妹アリスに対する批判的感情の中身を明らかにしてくれるように思う。

『カサマシマ公爵夫人』はロンドンのテロリストを描く、ジェイムズの作品群の中では異彩を放つ作品であるが、この中で主人公ハイアシンス・ロビンソン（Hyacinth Robinson）はポール・ミュニメントに初めて会った日、彼に連れられてテムズ河の南側の貧しい地区に属している、名前だけは美しいオードリー・コートの暗くて小さな部屋を訪れ、そこでロージーという寝たきりの彼の姉に会う。ハイアシンスは彼女の話を聞いて、彼女が「教育があって、生まれついての知性をもっているという印象」を受け、彼女は「ピ

ニーや［彼の幼馴染］ミニー・ヘニングよりずっと上手に意見を述べる」と感心する（*PC* I 140）。もちろん彼女は教育があるわけではない。ロージーの多少身びいきな説明によれば、新しい機械を発明するほどでありながら酒で破滅した炭鉱労働者の父親と、その死後洗濯女として二人を育てた野心家の母親から「立派な頭脳」を受け継いだだけである（*PC* I 142－44）。ハイアシンスはその後もたびたびそこを訪れ、また実際ロージーの部屋は作品の主要な人物たち、貴族から労働者にいたるまでが一堂に会する場となる。ロージーはベッドに横たわったまま、またはソファに横になって客を迎え、誰が現れようとまったく態度を変えることなく自然に楽しげに、時に辛辣な口調で相手と会話を楽しむ様子は、まるでサロンを開く女主人のようである。まさに1885年頃のアリス・ジェイムズの姿そのままである。ロージーがふと口にする言葉にも、アリス独特の少しひねった言い回しが聞き取れる。例えばロージーが五年前に母親をチフスで亡くしたことを語る言葉、「チフスが流行しましてね、あの間抜けなチフスはこの私をとばしておいて、そりゃ私はたいしたご馳走にはならなかったでしょうけど、あの本当に堂々とした人物を倒してしまったのです」（*PC* I 143）を読むと、アリスの日記を読んだ者は例えば彼女がインフルエンザを語る時の言葉、「あの小さな病原菌たちも、私の血管に停滞する薄い液体で宴会が催せると考えるほど間抜けではないらしい」（*D* 96）を思い出すだろう。

アリス・ジェイムズとロージーの類似に気づいた Leon Edel は、「〔ロージーの見せる〕辛辣さと敵意はヘンリーがアリスについて一番いやだと思った面を少なからず写している」（*The Middle Years* 187）と考えた。しかし辛辣さはともかく敵意がロージーにあるとは思えない。作品中でハイアシンスがロージーに苛立ちを感じるのは、彼の「もう少しましな所に住みたいと思いませんか？」という質問に対して、ロージーがベッドから飛び上がらんばかりにいきり立って「もし私が完全に満足していないのだと思っているなら大きな間違いよ」と答える時である（*PC* I 146）。彼はそれが不幸のせいで鈍感になっているしるしと考えて腹を立てるのであるが、彼女は作品の中で自

分の境遇を嘆くそぶりは見せず、それどころか「私が見たことのないものはないの。それがこんな風にここで横になっている特典よ。私は世界中のあらゆるものが見える」(*PC* I 149) と言ってのける。彼女は自分の部屋にまで上がってくるのに七十七段の階段を昇らないといけないことを、「自分で昇り降りすることはないけれど」知っているし (*PC* I 238)、彼女のところを慰問するレディ・オーロラ (Lady Aurora) は「彼女ほどにロンドンのことを知っている人はそんなにいないと思う」(*PC* I 244) と言う。またハイアシンスとポールがちょっとした遠出を計画すれば、ロージーは「どの場所も訪れたことはない」のに、蒸気船は混み合っているとか、帰りは酔った人が大勢いて面倒なことになるとか、ウルジーの宮殿が絶対にいいとか、「熱心に実に楽しそうに弟の休日の過ごし方」を我がことのように論じる (*PC* II 204)。

ロージーのこれらの知識は、アリス・ジェイムズがイギリスの事情について読んだり聞いたり間接的に知っていたのと同様、間接的に得たものである。例えば彼女はレディ・オーロラに来た道、帰る道を何度も繰り返し説明させる。また知りたいことがあれば誰かに経験してもらって、それを伝えてもらわねばならない。カサマシマ公爵夫人が自分が所有するものは何もないというと、レディ・オーロラに「ぜひ訪ねて行って、本当にそんなに貧しいのか私に話してください」(*PC* II 170) と頼まねばならない。彼女はこうして他者の知識を自分のものとし「私は世界中のあらゆるものが見える」と確固とした自信を持って言うのであるが、そのときハイアシンスは「でもあなたは弟さんの集会が、秘密組織とか革命クラブとかが見えていないではないですか」と反論する。彼女は確かに、ポールが属しているらしい地下組織についてのハイアシンスの質問に対して、「私は彼が何に属しているかなんて知らないわ。本人に聞けば」と答えている (*PC* I 149)。彼女は知らない世界があることに気づきながら、その世界を完全に切り離して「私が見たことのないものはない」と何のためらいもなく断言していることになる。そしてその知らない世界とは男性であるポールが彼女に知らせようしない公的な世界である。そう考えると、ヘンリー・ジェイムズが、アリスがイギリス人を嫌って

いる別の理由として「彼女が男性よりもはるかに多くの女性に会っている、いやむしろ彼女が今誰かに会うとしたら女性のみで、男性にはまったく会わない」（*L* 243）からという不可解な理由を上げているのも納得できる。ヘンリーの目から見れば、アリスが世界の半分（男性の、ジェイムズの考えではよりよい世界）を切り離し、手に入るだけの情報に基づいてイギリス人を嫌うのは、ロージーの物事の認識の仕方と同じなのだ。

小説『カサマシマ公爵夫人』の中でロージーの役割が意味をもつのは、彼女を主人公ハイアシンス・ロビンソンと対比させる時である。「何ものをも見逃すことのない若者」（*PC* I 169）と表現されるハイアシンスは貴族の血を伝統あるイギリス人貴族の父親から、民衆の血をフランス人で貧しいお針子の母親から受け継ぎ、「本性に流れる二つの血のせめぎ合いで彼には平安がなかった」（*PC* II 264）。「真実」を求めようとすると、彼はどちらかを切り捨てなければならない。地下組織の指導者ホッフェンダール（Hoffendahl）に会い、自分が「聖域の内奥」に入り「神聖の中の神聖」を見たと信じたハイアシンスは「イエズス会の修道士たちが教団の長に対して行う誓願のように、盲目的な服従」を誓う（*PC* II 48, 54）。しかしその後育ての親ピニーの残したわずかな遺産でヨーロッパに行く機会を得ると、パリで、ヴェニスで、彼は美に酔い、いかにその美が「過去の専制、残酷、排他、独占、略奪」の産物であろうと人生を豊かにするものだと確信して、その美に感動することのないだろうホッフェンダール（「彼ならヴェロネーゼの天井画をずたずたにして、皆に一片ずつ分け与えるだろう」）に背を向ける（*PC* II 145－46）。最後に某侯爵暗殺の指令が彼のもとに届けられる時、「変わってはいけないことがあるのです。僕は信じると約束したわけではない。従うと約束したのです」（*PC* II 371）と言って実行する意志を示しはするが、ホッフェンダールに従うということ、つまり母の側について行動するということは、母の罪を繰り返し、その忘れられた犯罪を再び白日の下に曝け出すという母への裏切り行為であるという恐ろしい矛盾に苦しめられ、彼は結局ピストルを自分の心臓に向けることを選ぶのである。

ハイアシンスには、二つのうちの一つを切り捨てることでしか平安はなかっただろう。もう一人の主人公、カサマシマ公爵夫人についても同じことが言える。ジェイムズの初期の作品『ロデリック・ハドソン』(*Roderick Hudson,* 1876) でクリスチーナ・ライトとしてロデリックにとっての「ファム・ファタール」の役を演じていた彼女は、今公爵のもとを離れ、ホッフェンダールにも近づき、ハイアシンスの代りに一身を犠牲にする覚悟も口にし、ポール・ミュニメントを通して組織のために金銭的援助もする。その動機が正義感であれ夫への復讐であれ単なる気まぐれであれ、「あなた方が求める変化が私たち［女性］のためにもなるとは考えられないのですか」(*PC* II 292) とポールに向かって詰問するときの彼女は真剣である。しかし彼女は女性であるがゆえに、ホッフェンダールからもポールからも信用してもらえない。夫の経済的支援が打ち切られるという通告を受け取ると、ポールは「あなたはあなたのお金を――というかご主人のお金を――私たちの仕事のためにくださったことで、あなたの貢献できる最上のものを下さったことになります。……あなたは信用されていないのです」(*PC* II 413) と言って彼女を切り捨ててしまう。貴族のタイトルと財産を捨てても、彼女に救いはないのだ。むしろ持っている方が貧しい人を援助することができるかもしれない。それすらも、助けるって「何人です？」(*PC* II 214) とポールは笑うかもしれない。

ハイアシンスもカサマシマ公爵夫人も、何ものをも切り捨てることができず、考え、混乱し、苦しむ。この二人がロージーについて、「僕はあの人が好きではありません」「私もです」(*PC* II 402) という会話を交わすのは当然といえば当然なのだ。

ヘンリー・ジェイムズがアリスを「再発見」したのは、彼女の死後、初めてアリスの日記を読んだ時だろう。彼はプライバシーを理由に出版には反対した。病気の妹を楽しませるために多少尾ひれをつけて話してやった人の噂話がそのまま実名で活字になっているのを見てショックを受けたと彼は言い、自分に送られてきた一冊を焼却してしまった。しかし彼のショックはアリス

の本当の姿を発見したことにもあったのではないだろうか。文学者としてのヘンリーは日記自体の文学的価値を認めている。

> It is heroic in its individuality, its independence—its face-to-face with the universe for and by herself—and the beauty and eloquence with which she often expresses this, let alone the rich irony and humour, constitute (...) a new claim for the family renown. (*L* 481)

しかし彼は彼女の日記の中に、明らかにロージー・ミュニメントとは違うアリス・ジェイムズの姿を認めたはずだ。アリスもロージーと同じように「もし私が完全に満足していないのだと思っているなら大きな間違いよ」と言ったかもしれない。しかし彼女は、そういう状況で満足しているのは外から見たら滑稽に見えるだろうと考えるだけの冷めた目をもっていた。彼女は自分のこもる私的な世界の外に公的な世界があることを決して忘れることはない。だから彼女が自分を肯定する時は、外の世界の人を意識していることが多い。「私はソファに座ったままで、それは素晴らしいことをいくつも学んだのだ」(*D* 46) と言うとき、彼女は小説家として方々へ出かけ種々の経験を積んでいる兄ヘンリーを念頭に置いて、決して自分が兄より劣っているわけではないと言おうとしている。また「長椅子から動けない体の麻痺した病人でも、その気になれば野蛮人を殺すスタンレーよりも幅広い経験をすることができる」(*D* 146) というのは、当時世間で話題になっていたアフリカの探検家スタンレーを引き合いに出しての言葉である。つまり経験というのは、公的な世界だけにあるわけではない、外に出て活動するだけが経験ではない、外に出ても何も見ない人がいるのだからと考えて、彼女は「私は私の見るのが四分の一インチに過ぎないとしても、それを本当の意味で見ている。大切なのは主体なのだ」(*D* 31) と言って自分を肯定する。その言い方はヘンリー・ジェイムズそのままである。小説家ジェイムズも「経験」について「想像力のある精神であれば、……人生のほんのかすかな暗示も自分のものとし、空気の鼓動そのものを啓示に変える」と「フィクションの技法」("The Art of

Fiction”）で論じている（“AF” 31－32）。しかしアリスは同時にそのような自己肯定が外の世界から見ればどんなに滑稽かも意識しているのだ。ある日彼女はナースの言葉で、自分が世間に対しては「頭痛」を代表していると気づいて、こんなことを言う。

> What a grotesque I am to be sure ! Lying in this room, with the resistance of a thistle-down, having illusory moments of throbbing with the pulse of the Race, the Mystery to be solved at the next breath and the fountain of all Happiness within me—the sense of vitality, in short, simply proportionate to the excess of weakness !—To sit by and watch these absurdities is amusing in its way.... (*D* 48－49)

この冷静で苦い自己認識、自己賛美と自己否定の絶妙なバランスを見ると、彼女が決してロージーのように閉じこもった世界の中で（もちろん閉じこもる生活を余儀なくされたということはジェイムズもハイアシンスも気づいているから、ハイアシンスは同情をこめて彼女の「ストイシズム」に感嘆している）、他者の経験を自分の経験として、世界について「確信」をもつ単純な人物ではないことが分かるだろう。

それでは、なぜヘンリー・ジェイムズは家族についての覚え書の中で、兄弟に捧げたと同じようなオマージュを妹アリスに捧げることをしなかったのだろう。アリスの日記を読んだ後ウィリアムに当てた手紙の中で、ヘンリー・ジェイムズは彼女について「彼女の意志と個性の並外れた強烈さが、普通の世界での『健康』な人が生きる他と同等で相補的な生き方をほとんど不可能にしていたでしょう」、だから彼女にとっては病気が「生という実際的な問題の唯一の解決法」だった（*L* 481）と、書いている。この言い方は彼のミニー・テンプルについての言い方とよく似ている。彼は自伝第二巻で「彼女が普通の運命だったら、あの落ち着かない精神、あの実に軽やかに向こう見ずな気短かさをどんな風にして和らげたり対応したりできただろうか」と自分に問い、彼女に合うような「普通の運命」など、どこにもなかっただろう、と結んでいる（*NSB* 431）。この二人の女性のように強い個性と強烈

な生命力をもった女性は、普通の人生に向かないから病気の方がよかった、死んだ方がよかった、という言い方である。ジェイムズは頭の中でアリスとミニーを重ね合わせた上で、ミニーを小説のモデルに合うように彼女の声を書き換えて、それを高らかに賛美し、一方アリスの方は沈黙させてしまうのを選んだのである。

さらにアリス・ジェイムズの日記には幼いころの思い出、子供のようだった父親、家族で見に行った芝居の思い出などが散りばめられている。ヘンリー・ジェイムズの自伝でも扱われるエピソードである。ヘンリーに自伝を書かせるきっかけを与えたのは、この妹の日記でもあったのではないだろうか。日記という不完全な自伝を書き換えて、もっと本格的な自伝を書こうと思わせたのではないだろうか。アリスが日記の中で洩らしている。「ハリーは私の唇からこぼれ落ちた真珠をいっぱい自分のページに埋め込んでいる」(*D* 212) と。彼女の日記そのものを自分のページの中に埋め込んだとすれば、ヘンリー・ジェイムズが特に自伝の中では、意識的であれ無意識的であれ、アリスを隠してしまう必要を感じたのは当然かもしれないのだ。

注

本稿は、日本アメリカ文学会関西支部１月例会（2008年１月12日、於龍谷大学）におけるシンポジウム「ヘンリー・ジェイムズ――家族、南北戦争、帝国主義」で口頭発表した原稿に加筆したものである。

1　アリス・ジェイムズは1889年５月31日から1892年の死の直前まで日記を書いていた。彼女の死後友人キャサリン・ローリングがアリスの三人の兄と自分用に四部それを印刷し、ウィリアムとヘンリーに送って、出版についての意向を尋ねたところ、兄たちの反対にあい、断念している。結局、不完全ながら初めて世に出たのが1934年、Edel が完全な形で出版したのが1964年であった。

2　アリスはもちろん『カサマシマ公爵夫人』を読み賞賛したので、その良さを認めなかった兄ウィリアムに対しては「一番上の兄、わが母の胎内から最初に生まれ出た子供のことを、フローベールがブルジョアと呼んだ人々の仲間だと看做さなければならないなんて悲しい」と嘆いているほどだ（Yeazell 129)。しかし彼女がロージーと自分との類似に気づいていたのか、いなかったのか、それには一言も言及していない。

主要参考文献

Boudreau, Kristin. "'A Barnum Monstrosity': Alice James and the Spectacle of Sympathy." *American Literature* 65: 1 (March 1993), 53 – 67.

Edel, Leon. "The Portrait of Alice James." An Introduction to *The Diary of Alice James.*

——. *Henry James* Vol. III. *The Middle Years, 1882 – 1895.* Philadelphia: J. P. Lippincott Co., 1962.

Fromm, Gloria. "Alice in Jamesland." *The Henry James Review* 10:2 (Spring 1989), 84 – 86.

Habegger, Alfred. *The Father: A Life of Henry James, Sr.* New York: Farrar, Straus and Giroux, 1994.

——. *Henry James and the "Woman Business."* Cambridge: Cambridge U. P., 1989.

James, Alice. *The Diary of Alice James.* Ed. by Leon Edel. New York: Dodd, Mead & Co., 1964.

James, Henry. *A Small Boy and Others.* London: Macmillan, 1913.

——. *Notes of a Son and Brother.* New York: Charles Scribner's Sons, 1914.

——. *Middle Years.* London: W. Collins Sons & Co., 1917.

——. *Autobiography.* Ed. by F. W. Dupee. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1956.

——. *The Princess Casamassima.* In 2 vols. New York: Charles Scribner's Sons, 1936.

——. *Henry James Letters.* Ed. Leon Edel. In 4 vols. Vol III (1883 – 1895). Cambridge: The Belknap Press of Harvard U. P., 1980.

——. "The Art of Fiction (1884)." *The House of Fiction.* Ed. by Leon Edel. London: Mercury Books, 1957.

Lewis, R. W. B. *The Jameses: A Family Narrative.* New York: Farrar, Straus and Giroux, 1961.

Lohn, Linda M. "The Neurasthenic Dilemma: Mental Dis-ease and Epistemology in James's *The Princess Casamassima.*" *American Transcendental Quarterly* 5 (1991), 125 – 35.

Stivers, David. "Witnessing the Invisible: Narrative Mediation in *The Princess Casamassima.*" *The Henry James Review* 28: 2 (Spring 2007), 159 – 73.

Strous, Jean. *Alice James: A Biography.* Boston: Houghton Mifflin, 1980.

Yeazell, Ruth Bernard. *The Death and Letters of Alice James.* Berkeley: California U. P., 1981.

舟阪洋子　「書く自己と書かれる自己——自伝として読むアリス・ジェイムズの日記」『テクストの地平』　富山・加藤・石川編.　東京：英宝社、2005.

舟阪洋子・市川美香子・水野尚之訳『ヘンリー・ジェイムズ自伝——ある少年の思い出』(*A Small Boy and Others*) 京都：臨川書店、1994.